

優秀賞

夜と壁

新潟県 伊藤 桃子

落ち着かない夜がある。

仕事がうまくいかなくて、疲れた身体と心を引きずりながら帰ってきた夜。仲間と騒いで、楽しかったはずなのに寂しさを抱いて帰り道を歩いた夜。静まり返った部屋で、ひとり物思いにふける夜。

そんなとき、わたしは部屋の隅で、壁にびったりと背中をつけて小さく座る。温めた牛乳の入ったマグカップを両手に包みながら座ることもあれば、柔らかいクッションを抱えながら座ることもある。何も持たずに、ただぼんやりと壁に背を預けることもある。

壁は、いつも無機質に、冷たく、まっすぐにそこにある。温かくも柔らかくもない。ただ、いつも確かにそこにある。

ひとりぼっちの部屋の中で、壁にもたれて見慣れた部屋をぼんやりと眺めていると、ぐらぐらしていた落ち着かない心が、少しずつ少しずつ静まってゆくのに気づく。浅かった呼吸が、ゆっくりと深くなってゆくのを感ずる。決して動かない、変わらない、いつもと同じ壁が、わたしを安心させてくれる。

実は、近いうちに引越しをすることになっている。ひとり感傷に浸りながら荷造りをしていると、ふと切ない気持ちになってきて、いつもの壁にもたれて小さく息を吐く。わたしはこんなにもこの部屋との別れを惜しんでいるのに、壁は全く意に介さない様子で、いつものように、堅く静かにそこにある。わたしが去った後にも、変わらずに、ただここにあるのだろう。やがて、壁との別れを悲しんでいる自分が可笑しくなってきた、少し笑ってしまう。こうして、背中から伝わるその確かな平面に、わたしはまた救われる。

新しい部屋にも、わたしの心を支えてくれるのにびったり壁が、あるだろうか。決して揺るがない、どっしりと優しい壁に、また出会えればいい。